

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.12 December 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

12

CONTENTS

- ・ 巻頭言
Devil's advocate (悪魔の代弁者)
／井上 昭洋 1
- ・ 文脈で読む「身上さとし」(10)
明治 21 年 2 月～4 月
／深谷 耕治 2
- ・ 音のちから—中国古代の人と音楽 (17)
出土楽器が語る音の世界—瑟—
／中 純子 3
- ・ ヴァチカン便り (65)
モンゴルへの司牧の旅
／山口 英雄 4
- ・ ニューヨーク通信 (18)
NY インターフェイス平和の集い
／福井 陽一 5
- ・ 思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考 (最終回)
結び
／八木 三郎 6
- ・ 2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』
に学ぶ (9)
第 4 講：146 「御苦労さん」
／澤井 治郎 7
- ・ おやさと研究所ニュース 8
第 361 回研究報告会「諸井慶徳の宗教論—教義学との連関をめぐって—」
(9 月 27 日)／トルコでの国際ワークショップに参加 (10 月 4 日)／
2023 年度公開教学講座のご案内／
2022 年度「教学と現代」

巻頭言

Devil's advocate (悪魔の代弁者)

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

Devil's advocate (悪魔の代弁者) とは、カトリックにおいて聖人や福者の候補者を審議する際、候補者自身の欠点や提出された証拠の欠陥を指摘するために設けられた役職のことであった。転じて現在では、ある主張の妥当性を明らかにするために、あえて疑義をただしたり、批判や反論をしたりする人のことを指す。ディベートにおけるテクニックであり、また組織の意思決定プロセスにおいてより適切な判断を下すために、意図的にそのような立場をとる人を設定したりする。

私が初めてこの言葉を聞いたのは、留学時代の大学院の歴史学のゼミでのことだった。研究においては常に自分自身の中に Devil's advocate を設定することがより良い考察をするために必要である、といったことを指導されたように記憶している。ある歴史的事象を解釈する際に独りよがりにならないために、反対の立場をとり疑問を投げかけるもう一人の自分を常に自分自身の中に持て、ということだったと思う。研究においては常に異なる解釈の可能性を考えたつ考察を進めていくのは当然のことだ。ただ、その「異なる」解釈は必ずしも先行する解釈に相対するものではなく、単なるもう一つの解釈であることも多い。そのため、より研ぎ澄まされた結論を導き出すためには、自らの解釈に反論し、それを否定する立場や意見を意図的に設けること、すなわち Devil's advocate 的な視点を導き入れることが重要になってくるというわけだ。

しかしながら、人は同時に異なる立ち位置から対象に視線を投げかけることはできないので、自分自身のなかに Devil's advocate を持つことは実際のところ難しい。ただし、調査される側と調査する側、文化のインサイダーとアウトサイダーというように相対する 2 つの立場を併せ持つネイティブの人類学者であれば、自分の文化に対してどちらの立場に立つにせよ、自らのなかに Devil's

advocate を持つことができるだろう。自文化に対して距離を取ること、自文化に対して他者性を身につけることが求められるので、厄介ではあるが、2 つの相対する立場を備えていることは研究者としての強みにもなる。ネイティブ人類学においては、そのような認識論的な問題に加え、ネイティブ人類学者のハイブリッドな立場を生かした方法論についても議論が重ねられてきた。

信仰を持つ宗教研究者が自分の信仰する宗教を自身の学問 (ディシプリン) を用いて研究する場合も、研究者と信仰者の 2 つの相対する立場を併せ持ったまま、対象にアプローチすることになる。しかし、研究者であり信仰者であるというハイブリッドな特性を活かして自分の信仰する宗教を研究することの意味や可能性について、十分な議論がなされてきたようには思われない。少なくとも天理教を信仰する研究者が、自身のハイブリッドな立場を意識しつつ、天理教について自らの学問の理論を用いて研究するということはほとんどなかったのではないだろうか。

自分の宗教を扱う時は宗教学者・人類学者としてではなく、神学者・宗教家として接する。宗教学や人類学の理論を用いず、それらの学問の研究者としてのもう一人の自分に目をつぶり、安全な領域 (神学の分野) で対処する。研究者として自分の信仰する宗教に正面から取り組むには認識論的問題を乗り越えねばならないし、鍛えられた方法論も必要だ。かつて、キリスト教を受容して間もない非西洋社会の人々を「日曜日はキリスト教徒、月曜日は呪術師」と (やや見下して) 形容することがあったが、同じような使い分け・棲み分けが、研究者の側でもなされてきたわけである。Devil's advocate を内なる他者として持つこと (アウトサイダーとして自分の宗教を研究すること) が難しいのであれば、リアルな他者、すなわち、未信者の研究者との対話を積極的に試みるべきだろう。

明治21年3月8日(陰暦正月26日)、教祖一年祭の執行に際して、人々は大きなふしに直面した。年祭当日、午前5時から「かぐらづとめ」が勤められ、引き続き「十二下り」も勤められたが、年祭の祭典に取り掛かろうとした時、大神教会の人々がやってきて祭典の中止を命じたのである。その後、大神教会の人々はいったん退出したが、祭典の再開直後に樺本分署の巡查8人が土足で乗り込んできて、そのまま一年祭を中止してしまった。以降、人々は教会公認について改めて真剣に考えるようになる。こうした流れをふまえながら、その頃の増野正兵衛に関する「おさしづ」についてみていきたい。

- ・明治21年2月21日(陰暦正月10日):増野正兵衛口中左の内裏一寸腫れ居所悪しきに付伺/同日帰国伺
- ・3月11日(陰暦正月29日):増野正兵衛転宅後々々内々心得伺/同日、増野松輔足袋職教えるに付伺
- ・4月6日(陰暦2月25日)朝:増野正兵衛齒浮き、居所障り伺
- ・4月9日(陰暦2月28日):眞之亮不在中おぢばへ巡查踏み込み来り、寄留なき故厳しく言うに付、増野正兵衛国々所々へたすけに行つて宜しきや、おやしきに踏み止つて宜しきや伺

明治21年2月21日、増野正兵衛は「口中左の内裏一寸腫れ居所悪しき」について神意を伺っている。「先ずへ内々事情、一つ事情何でも安心さし、見る処一つ思案、幾々幾年々理を見て思案、余儀無き一場も立ち越え」と、内々の事情について「何でも安心」させながら、年々に現れてくることを見て思案し、やむを得ない場合も乗り越えるようにと諭されている。また、「どういふ事一つ種十分下ろせ。直ぐとせば直ぐと生える。大抵作り上げた。一つ際に雨風が吹く。一年毛上ほんに良かった日あったな」と、内々の事情について実りある日を楽しみに真実の種を蒔くように促されている。また、同日、正兵衛は神戸への帰郷に際して「案じる道は無いで」とのお言葉も頂いている。

さて、3月8日、上記の教祖一年祭のふしが起きた。人々は、翌日9日に「おさしづ」を伺っている。押して「天理教会設立」についても伺っており、正兵衛にとっても「教会設立」は大きなテーマとなっていたであろう。

そうした中、正兵衛自身の事については、2日後の11日に、「転宅後々々内々心得」について「おさしづ」を仰いでいる。住居の移転については、1月24日、2月10・11日の「おさしづ」ですでに許しは得ており、その後、実際に転宅したのであろう。一カ月ほど経って、改めて「内々」の「心得」を伺った。すると、「一つ道心定まり心鎮め、心を治め安心さしづして置く」と、理を聞いて、心を治めて通れば安心であることが伝えられている。また、同日、増野松輔(正兵衛の姉・まちの長男)の「足袋職教える」についても伺っている。「先々どういふ定め、速やか心定め」と、おそらく足袋職に関する事以上により広い文脈で、先々を見据えて心を定めるように促されている。

それから約1カ月後の4月6日、正兵衛は再び口中の齒の障

り(齒浮き)と「居所障り」について神意を尋ねた。「世上の楽しみ一つ聞く。多く中ざつと一つ安心何故ならん。日限十分の道を知らそう」と、おそらく正兵衛の周りの者たちに対して「世間的な楽しみを聞き、いろいろ考える中でなぜ安心できないのか、日限を仕切って十分安心できる道を知らせよう」と諭されている。正兵衛の家内の者にしてみれば、神戸という繁華な町に住んでいることも、おぢば移転を躊躇する大きな要因の一つではなかったろうか。

一年祭のふし後、初代真柱をはじめ要職にあった人々は東京に赴き、教会公認に向けて奔走していた。そうした中、おぢばでは、4月9日に巡查が踏み込んでくるという事態が起き、真柱不在の中、正兵衛はおぢばに留まるべきか、おたすけに出るべきか、神意を伺っている。「心待って居る人も所々一寸聞く」と国々所々で待っている人々にふれながらも、「又一つぢば、一時処、細い楽しみだんへ重ね重ね処、一寸通り難い」と、ぢばの事情も治めるように諭されている。

「口」と「齒」

さて、『身上さとし』では、「口」の項目で増野正兵衛の2月21日の「おさしづ」を取り上げて、「年々に見えて来る理を見て思案し、のるかそるかという内々(家内)治まらん、どんと定めにくい、余儀ない場合を克服して、種子を十分におろせば、すぐに生えて来るという意味で、口中左の内裏一寸はれたのは内々神一条の精神を治めよと指示されたのである」と説明している⁽¹⁾。また、「齒」の項目で4月6日の「おさしづ」を取り上げて「齒浮くのは、家内の者の心がそれぞれ違つて一手一つを欠き、落ち着かないのはいけぬ。と指示していられるのであろう」と述べている⁽²⁾。

ここまで見てきた文脈で言えば、正兵衛の「口」や「齒」に関する「おさしづ」では、正兵衛をはじめとする家内の者に対して、世間的・一時的な楽しみではなく、長い目で見たときの「安心」について伝えられているように思われる。一見すると正兵衛の身上の障りとは関係のないように見える転宅の心得や、松輔の足袋職に関する「おさしづ」でも、やはり「先々を見据えた安心」について諭されていた。また、見逃してはいけないのは、2月21日、4月6日ともに、「口」や「齒」だけではなく、「居所障り」についても伺っている。「居所」は、「居場所・住まい」を示すとされるが、おそらくこの時期の「転宅」だけではなく、おぢば移転の心定めを忘れないように「居所障り」を与えられていたのではないだろうか。

「先々を見据えた安心」は、より広くは、教祖一年祭のふし・教会公認運動という文脈でも考えられよう。当時の人々にとっては、眼前の状況はとて「安心」できるものではなかった。転宅の心得に際して伺った「一つ道心定まり心鎮め、心を治め安心さしづして置く」という言葉が印象深い。

[註]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、90頁。

(2) 同書、109頁。

古代絃楽器の瑟

「士は故無くして琴・瑟を徹めず」（『礼記』曲礼下）とあり、古代では琴・瑟の奏樂が一つのたしなみとされていたようである。瑟と併称される「琴」は、かの孔子も奏でたとされ、いま日本で謂う「お琴」とは違い、7本の絃を張っただけの簡素なもので、琴柱も使われていない。それに比べて「瑟」は25絃のものが多く、琴柱も使い、古代の祭礼の主要楽器であった。前回笙について述べた際にも引用した『詩経』小雅「鹿鳴」に、饗宴の歌として「我に嘉賓有り、瑟を鼓き笙を吹く」とあり、『儀礼』郷飲酒礼篇でも、瑟は笙とともに奏樂の主要楽器とされた。さらに『詩経』と並んで先秦時期を代表する詩のアンソロジー『楚辞』の「遠遊」にも、「湘水の精霊に瑟を演奏させる（湘靈鼓瑟）」という記述もみえ、瑟は確かに中国古代の奏樂に必須の楽器であったらしい。琴とならんで、みながよく知る楽器であったから、琴瑟の調和が、夫婦・兄弟の仲の良いたとえとして用いられたのであろう。『詩経』小雅「常棣」にも、「妻や子の睦まじいことは琴・瑟を奏でるようで、兄弟が集まれば、親しく楽しみあう（妻子好合、如鼓瑟琴、兄弟既翕、和楽且湛）」などと用いられた。



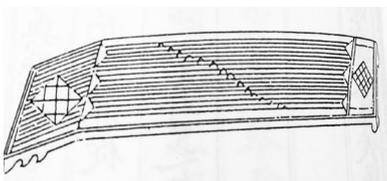
その形状は、出土楽器にみえ、春秋晩期のものの復元（左写真 宜昌市博物館）や、戦国中期のもの（右写真 荊州博物館）など多く展示されている（『中国音楽文物体系 湖北巻』より）。

それでは瑟はどんな音色だったのか。祭礼に用いられた瑟のゆったりとした奏樂のさまが、『礼記』樂記に記されている。

宗廟の大祭では「清廟」の詩を歌うが、そのとき用いる楽器の瑟は、濁った音を出す朱い練り糸を絃にし、瑟の底に音をゆるくする大きな孔がある。そして一人が弾唱すると三人が唱和するというもので、先王の音楽のなごりである。

（清廟之瑟、朱絃而疏越、壹倡而三歎、有遺音者矣）

瑟は、宮中祭祀のために中国雅楽器として伝承された。宋代に編まれた『樂書』樂図論「雅部」には、以下の絵がみえる。



宋代以降も、明代や清代でも雅樂には用いられていたことは、「明会典」や「皇朝礼器図式」（『中国古代器物大詞典 楽器』河北教育出版社、2009年、214頁）などからも理解される。

唐代の瑟

唐代には、白居易「五絃弾」（『白居易集箋校』巻3）で、当時巷で流行の五絃の琵琶と比べて瑟を次のように言う。

私が聞くところでは、正始の音（古代先王の由緒正しい音楽）というのはこんなものではないのだ。朱い練り糸を絃にし、底に音をゆるくする大きな孔がある瑟で奏でる「清廟」の歌は、一人が弾唱するとそれを繰り返し唱和し、節回しは淡泊で、ゆっくりとした拍子で、声も少ない。なご

やかでのびのびしていて天地自然の元気をまねきよせ、これを聴くと思わず知らずに心が平和になる。人間というものは今を重んじて古を軽んずる。古琴は絃が張ってあっても弾くものもない。趙璧の五絃琵琶の藝が完成してからは、（そんな正始の音を出す）二十五絃の瑟は五絃琵琶にはとうてい敵わなくなった。（吾聞正始之音不如是。正始之音其若何、朱絃疎越清廟歌、一弾一唱再三歎、曲淡節稀声不多。融融曳曳召元氣、聴之不觉心平和。人情重今多賤古、古琴有絃人不撫。更從趙璧藝成來、二十五絃不如五）

唐代には、瑟は一般に用いられていたのだろうか。音楽を愛好した白居易の詩篇には、瑟について実際に使用された楽器として具体的にその音色などを詠じたものは見当たらない。ただ、「箏」（『白居易集箋校』巻31）と題する詩に、「趙瑟 清くして相い似たり、胡琴 闇がしくして同じからず」とあり、箏は瑟に似ているが、胡琴（琵琶のこと）の騒がしいのとは違うと言う。ここで取り上げられた箏は、瑟と同じく琴柱を使用する13絃の楽器で唐代に多く用いられていた。日本の正倉院には確かに瑟の残欠（尾部の板一枚）が残されており、『東大寺献物帳 国家珍宝帳』（天平勝宝8載（756）の目録）には、「楸木瑟一張」との記載はある。しかしながら、その後日本の雅樂では使われることがあまり無かったようである。「箏」も、『国家珍宝帳』に記載され、正倉院に残欠があり、四面はあったとされている（岸辺成雄『天平のひびき 正倉院の楽器』音楽之友社、1984年、28頁）。その後、日本では箏が雅楽器として用いられ今に至ることを考えると、瑟に替って形態が同じ箏が用いられたという推測も可能かもしれない。宋代に編まれた『集韻』には、「ある説には、秦人の薄義親子が瑟を争って壊して二つにしたので、箏と名付けられた（一説秦人薄義父子争瑟而分之、因以為名）」とあるほどであるから。

瑟がつくる夢幻の世界

瑟は、唐詩のなかでは実際の奏樂よりも、古代との繋がりでのなかで詠じられた。先にも述べた『楚辞』遠遊の「湘靈鼓瑟」を題材とした科挙の試験があり、神仙世界の音楽をいかに美しく詠じるかが競われた。瑟を詩題にした有名作品は、晩唐詩人李商隱（字は義山、811～858）が、失われた恋の悲しみを、模糊としたイメージで綴る「錦瑟」（『李義山詩集』巻上）である。

錦瑟無端五十絃	錦瑟 端無くも五十絃
一絃一柱思華年	一絃一柱 華年を思う
莊生曉夢迷蝴蝶	莊生の曉夢 蝴蝶に迷い
望帝春心託杜鵑	望帝の春心 杜鵑に託す
滄海月明珠有淚	滄海 月明らかにして珠に涙有り
藍田日暖玉生煙	藍田 日暖かにして 玉 煙を生ず
此情可待成追憶	此の情 追憶を成すを待つ可けんや
只是當時已惘然	只だ是れ當時已に惘然

詳しくは川合康三『李商隱詩選』（岩波文庫、2008年）の解説に譲るとして、詩と現実の結びつきを故意に曖昧にするとされる李商隱が、『李義山詩集』の巻頭を飾る代表作の詩題に「瑟」を選んだところに、人を夢幻の世界へ誘う楽器として、実用とは距離をおく唐代の瑟のありかたの一端が垣間見える。

モンゴルへの司牧の旅

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

モンゴルへの司牧の旅

ローマ法王フランチェスコは、司牧の旅として、2023年8月31日から9月4日までモンゴルを訪問した。モンゴルでは、現地の政治的指導者やカソリック信者と交流を行った。信者と言っても、モンゴルにおけるカソリック信者は1,500人程度で、話し合いもそれほど深い部分まで立ち入ったものではなかった。記念写真も1回の撮影で全員が収まった。

法王は、キリストは神の恩寵を世界に伝えるために、弟子達を各地に派遣したが、それは親としての神との関係を広めるためであると述べた。そして、一つの神を認めさせ、色々な民族とも兄弟姉妹で同胞であることを教えた。こうした話は、モンゴルの隣の国、中国を念頭においてなされている。イエスの使者から生まれた教会は貧しいが、純粋な信仰に裏打ちされている。法王は言う。彼らは政治情勢は念頭がなく、神の恩寵を信じており、そこには神の恩寵を信ずる慈悲の言葉があり、人々を善へと導く力があるのみである。教会は貧しい人々、また神の恩寵を必要とする人たちの堅固なる声として世界に生まれた。

今、対話することが難しい国や地域がある。中国の司教や司祭はモンゴルのミサに出席しようとしても、まだ国の許可がない。しかし、中国は平和への熱意を持っている。そのよい例が、中国は「平和の使節団を送っている」という法王のコメントである。法王は、モンゴルには1200年代、中国東方からカスピ海まで治めたジンギス・カーンがいたと言及したのだった。

ローマへ戻る飛行機内でのインタビューより

(問) 法王の大ロシアに関する賛辞の言葉は、ウクライナ国民の怒りを招いたようです。そしてロシア帝国主義を賛美し、プーチン型政治を賛美しました。今でもそういうお考えなのでしょうか。

(答) 私は常に対話が必要だと言ったのです。良い文化でもイデオロギーになってしまうと、毒になります。このことは個人に対しても、教会に対しても常に言っていることです。誤った動きの中に独裁制が生まれます。独裁制では対話は不可能であり、文化と共に歩めないのです。

(問) 中国との関係はどうなっていますか。また、ズッピ特使について、何か新しい情報はありますか。

(答) ズッピは、キーウ、モスクワ、そしてアメリカ、中国を訪れる計画を練っていました。彼は対話を目指し、世界に視野を向けています。モザンビークでの経験もある。中国との関係も相互尊重だし、道はかなり開けています。我々は宗教的見解をもとにして前進しなければなりません。中国人民が、キリストの教会は中国の文化を受け入れないとか、彼らの価値を認めないとは私は思っていないし、外国に圧力をかけてくるだろうとも思ってもいません。私は中国人民を尊敬しています。

(問) 今、ベトナムを訪問する可能性がありますか。まだ他の国を訪問する旅の予定はありますか。

(答) ベトナムとの対話の窓は開かれていて、そして前進しています。私が行けなくても次の法王ヨハネス24世(!)が行くことになるでしょう。他の旅については近々フランスのマルセイユを予定しています。そして、ヨーロッパの

小さな国々もあるでしょう。できればそうした国を訪問したい。しかし、正直なところ、現在の私にとって、膝の病気のために、旅をすることは楽なことではありません。これは、時が解決してくれると思っています。

(問) 次のシノドス会議(司教会議)はパンドラの箱が開けられて、様々な意見が出て来るのでしょうか。

(答) それはそれでいいことです。蒸留水には味がないように、多様な意見を回避することは、我々の教義ではないからです。

(問) その場合、意見の多極化をどのように回避するのでしょうか。

(答) 司教会議は哲学的な討論の場ではなく、対話の場です。また、我々の会議はテレビの番組ではなく、宗教的な場であることも忘れてはなりません。

法王の特使ズッピは中国へ

元聖エジディオ共同体のメンバーであったズッピは、現法王より枢機卿に任命され、イタリア司教団の団長になっている。さらに、現在はイタリア・ボローニャ司教区の大司教でもある。ズッピはかつて聖エジディオ共同体時代、モザンビークの政府側と対抗勢力との間を取り持ち、何度も対話を繰り返し、最後には政府軍の代表者と反乱軍の代表者をローマに招請し、聖エジディオ共同体の本部の1室で、和平の調印をさせた功績がある。法王はその彼を、ウクライナ・ロシア紛争の仲介者となるよう、特使に任命したのだった。

ズッピは直ちにウクライナに飛び、大統領ゼレンスキーに面会して対話を行った。その後にロシアにも飛んだ。残念ながら、プーチン大統領には会えなかったが、その部下たちと対話を行うことができた。さらに、その後、アメリカにも渡り、平和を求める対話をした。アメリカはウクライナに多大な物資、軍事援助を行っている。ズッピ特使はそれらの武器製造、調達などについても話し合った。また、中国の力も侮れないということで、最終的に中国にも渡り、中国首脳とともに、ロシア・ウクライナ戦の停止について、対話を重ねた。その業績を、法王は讃えているのである。「何もしなかったら失敗する恐れは何もない。しかし試してみるということはいいことだ」と法王は述べている。

前イタリア大統領に黙祷

9月22日に亡くなった前イタリア大統領ジョルジョ・ナポリターノの遺体を収めたイタリア上院議院に、翌日早朝法王フランチェスコが弔問に訪れた。この出来事には、関係者一同驚きの様子を隠せなかった。ローマ法王は一般の人々の弔問が行われる前に、ナポリターノに対して弔問を行ったのである。ナポリターノは元イタリア共産党の党首であった。しかし、後年はヨーロッパ主義者となり、また大西洋主義者と言われて、彼に会う人全てを人格的にも魅了していた。法王とはその大統領の任期中に、2、3度会っているが、法王も彼の人格に魅せられた一人だった。前大統領は共産党員だったため、キリスト教的祝福は一切受けていない。そのため葬儀も、キリスト教的ではなく、上院議院の国民葬として、10月3日に執り行われた。いずれにしても、ローマ法王がイタリア大統領の死に際して弔問を行ったことは、きわめて異例のことである。

NY インターフェイス平和の集い

天理教ニューヨークセンター所長
福井 陽一 Yoichi Fukui

イスラエル・パレスチナ紛争

10月7日にパレスチナの過激派組織ハマスによるイスラエル攻撃が始まり、イスラエルはそれに対して宣戦布告を行い、戦争に突入したとのニュースが飛び込んできた。大規模な攻撃により、1万人以上の犠牲者を出している状況の中、ニューヨークでも大きな出来事が起きている。イスラエルは世界中で最も多くユダヤ人が住んでいる国であるが、2番目に多いのがニューヨーク市になる。市内のあちこちで、イスラエルの支援者とパレスチナの支援者との対立が深まりつつある。タイムズスクエアや国連本部付近、イスラエル総領事館前などで、大規模な抗議活動が実施され、逮捕者が出たほどだ。在ニューヨーク日本総領事館からは、デモに注意を喚起する呼びかけが出されている。市内の各地の大学でもデモが行われ、マンハッタン北部にあるコロンビア大学では、キャンパス内で大規模なパレスチナ支持集会が行われた。ニューヨークの金融業界や弁護士業界にはユダヤ系が多く、パレスチナ支持者は解雇されたり、就職内定が取り消されたりしているようだ。

ユダヤ人コミュニティが中心となり企画された集会には、ニューヨーク市長や知事が参加して、イスラエル支持を宣言しているが、一方では他のユダヤ人コミュニティが主催してイスラエル政府を批判し、パレスチナ人の解放を訴える集会も持たれている。

10月27日にニューヨークのグランドセントラル駅中央コンコースを埋め尽くした集会がその一例だ。彼らのスローガンは「ノット・イン・アワ・ネーム (Not in Our Name)」。「我々ユダヤ民族の名に誓っても、パレスチナ人に対するジェノサイドは許さない」との意味だそう。あまりにも大勢の人が集まり、業務を妨害したためか、この集会では数百人の拘束者が出ていた。民族大虐殺を経験したユダヤ人たちが勇気を出して、ジェノサイドという言葉がイスラエルに突きつけている。つまり、パレスチナ人たちの側に立つ人たちが、ユダヤ系アメリカ人の中にも生まれてきているのである。

ニューヨークの国連人権高等弁務官事務所のクレイグ所長は、国連は創設以来ずっと、イスラエルによるパレスチナ人の殺人と迫害を止められなかった。そして、今、ガザでは、民家、学校、教会、モスク、医療機関が無差別に攻撃され、何千人もの市民が虐殺されている。この国全体をアパルトヘイトが支配している。これはジェノサイドの教科書のような事例だ。国連が現実と妥協し、現実を見て見ぬふりをして失敗を繰り返したことを反省し、今こそ理想を実現しよう。私たちは皆、歴史の重要な瞬間に、どこに立っていたかについて責任を負うことになる。正義の側に立とうではないか、と訴えている。

それぞれの正義を通すがために、多くの尊い命を犠牲にして各地で戦争や紛争が行われていることを悲しく思うが、平和の難しさと平和の大切さを思わずにはおられない。

NY インターフェイス平和の集い

去る8月、広島・長崎の原爆犠牲者追悼と世界平和の祈念



【国連教会センター内でのインターフェイス祈念】

を目的とする「NY インターフェイス平和の集い」が開催され、天理教を代表して参加した。この集いはNY 平和ファウンデーション（代表・中垣顕実法師）が主催し、今年で30回目を迎えた。今回は市内3つの会場で3回に分けて、宗教の垣根を超えて、仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンドゥー教などからの宗教家や音楽家、舞踏家、団体代表らが集い平和を訴えた。1日目は8月5日「ヒロシマの日」にマンハッタンで最も古く17世紀半ばからイースト・ビレッジに位置しているセント・マークス教会で行われ、式典のあと、原爆が投下された時間に合わせて中庭で平和の鐘が鳴らされた。2日目は8月8日にジャパソサエティーで「長崎の日」を開催。9日は国連教会センターで「世界に向けてピースデー」が開催された。天理教の代表として3日間を通して追悼の詞を奏上、篠笛でのよろづよ八首演奏、そして雅楽演奏を行った。

パンデミックでバラバラになった平和の繋がりを祈りを通して再び取り戻し、新たなビジョンをもって平和な世界を目指して前進していこうという平和の集いとなった。争いの絶えない世界において、今こそ宗教や団体の垣根を超えた平和への祈りの大切さを感じている。

てをどり・イン・マンハッタン

マンハッタンにあるニューヨーク天理文化協会では、1997年7月から「てをどり・イン・マンハッタン」という名のもと、マンハッタンに神名を流し、世界の治まりを祈ることを目的に、毎月「ておどり」が続けられている。今年で26年になるが、マンハッタンの中心地で9つの鳴物を揃えてつとめられるおつとめは、今のところ天理文化協会だけである。平和への祈りを込めながら継続していき、祈りを通して平和への輪が広まっていくように願っている。

【お詫びと訂正】

前回の連載(2023年9月号)で、SoulFire ソウルファイヤー・フェイス・カンファレンスの主催が「アメリカ伝道庁教化育成委員会」(左段下から22～23行目)と記載いたしました。正しくは、「アメリカ伝道庁」の主催でした。訂正してお詫びいたします。

「碍」の字表記問題再考（最終回）結び

本連載の締めくくりとして、わが国の人間観、障害者観に衝撃的で、大きな影響を与えたと思われる『因果經和讃』を紹介したい。

いんがきょうわさん
『因果經和讃』

南無^{なんむ}本師^{ほんし}の釋迦^{しやくかに}如来^{らいらい} 五濁^{ごじよく}惡世^{あくせ}に出現^{しゆげん}し 說法^{せつぽう}波羅^{はら}那^なに
 し玉^{たま}へり 其時^{そのとき}御弟^{のみでし}子の阿難^{あなん}尊^{そん}
 善惡^{ぜんあく}苦樂^{くらく}の其故^{そのゆゑ}を 未來^{みらい}末世^{まいせ}の我等^{われら}まで 一一^{いちいち}知しめたま
 はんと 問^とつこたへつ因果^{いんがきょう}經^{きやう}
 今^{いま}此經^{このきやう}を和讃^{わさん}とす 後世^{ごせ}の菩提^{ぼだい}を願^{ねが}ふ人^{ひと} 老若^{ろうじやく}男女^{なんにょ}もろと
 もに 唱^{とな}てに我身^{わがみ}に引^ひくらべ
 因果^{いんが}の道理^{どうり}辨^わまへて 佛道^{ぶつだう}修行^{しゆぎやう}を致^{いた}すべし 現在^{げんざい}諸人^{しよにん}の有^{あり}
 さまは 皆^{みな}これ過去^{くわこ}の報^{むくい}なり
 六根^{ろくこん}器量^{きりやう}のよき人は 忍辱^{にんにく}柔和^{じやくわ}の果報^{くわほう}なり 生^{うまれ}て醜^{みにく}きその
 ものは 腹^{はら}を立^たてる其^{その}むくひ
 貧乏^{びんぼう}無福^{むふく}に生^うまゝ 慳貪^{けんこん}邪見^{じやけん}の其^{その}しるし 唾^{おしつぼ}聲^{せい}となるも
 のは 佛法^{ぶつぽう}誇^こつた過^{とが}とかや
 命^{いのち}も短^{みぢ}く子^こもなきは 殺生^{せつじやう}したる報^{むく}ひなり 子^こ共^{ども}男女^{なんにょ}の榮^{さか}
 へるは 物^{もの}の命^{いのち}を救^{すく}ふゆへ
 長^{ちやう}命^{めい}無病^{むびやう}のその人は 慈^じ悲^ひ心^{しん}深^{しん}き恵^{めぐ}なり 福^{ふく}徳^{とく}圓^{えん}満^{まん}なる
 家は 三寶^{さんぽう}供養^{くやう}の善根^{ぜんこん}よ
 利根^{りこん}發明^{ほつめい}すぐるゝは 念^{ねん}佛^{ぶつ}誦^{じゆ}經^{きやう}の功徳^{くどく}なり 愚^ぐ頓^{どん}で無智^{むち}な
 る其者^{そのもの}は 畜生^{ちくじやう}變化^{へんげ}の者^{もの}ぞかし
 下劣^{げれつ}で人に使^{つか}はるは 債^{おん}をきたる報^{むく}ひなり 業^{ごう}病^{びやう}惡^{あく}病^{びやう}わづ
 らふは 破戒^{はかい}で三寶^{さんぽう}誘^そる咎^{とが}
 口^{こう}中^{ちゆう}臭^{くさ}き劣^{りやく}なきは 惡^{あく}口^く舌^{じやく}人^{にん}ごとよ 眼^{がん}病^{びやう}色^{いろ}々^{いろ}やむ人^{にん}
 は 佛^{ぶつ}に燈^{とう}明^{めい}おしむ故^{ゆゑ}
 下賤^{げせん}で人に愧^{はぢ}かしくは 憍^{きやう}慢^{まん}懈^{かい}怠^{たい}の心^{こころ}より 高^{かう}位^い高^{かう}官^い備^びは
 るは 禮^{らい}拜^{はい}恭^{きやう}敬^{きやう}の其^{その}功徳^{くどく}
 五^ご逆^{ぎやく}十^{じゆ}惡^{あく}造^{ぞう}りなば 無^む間^{かん}三^{さん}十^{じゆ}六^{ろく}地^ち獄^{ぎやく} 此^{この}經^{きやう}聽^きてあらた
 めば 即^{すなはち}普^ぼ薩^{さつ}よ佛^{ぶつ}なり
 此^{この}は過^か去^こにて現^{げん}在^{ざい}に 種^{しゆ}ればの種^{しゆ}となる 蓮^{れん}を植^うれば蓮^{れん}の
 華^{はな} 看^みよに九^く品^{ほん}まで
 因果^{いんが}の道理^{どうり}明^{あき}らかに 佛^{ぶつ}に嘘^{うそ}はなきものぞ 只^{ただ}一向^{いつかう}に疑^{うた}が
 はず 南無^{なんむ}阿^あ弥^あ陀^だ信^{しん}ずべし

この『因果經和讃』の基になっているのが、6世紀頃に中国で成立した『善惡因果經』である。わが国には7世紀頃に伝来したと言われている。内容は、上記にあるように、釈尊が弟子である阿難の疑問に対して、一つひとつ回答したものをまとめたものである。その疑問とは、人々の身分格差に違いがあるのはなぜか、一人ひとりの風貌や能力の違いはなぜ生じるのかといった疑問などに答えたものである。釈尊は前世での行いによって、その結果が現世で現われ、現世の生きざまが来世へとつながる「三世因果」の理を説いている。すべては「因果応報」であることを人々に示した『經典』である。いずれにせよ、ここでも心身に障害のある人を題材にして、因果応報の理を絶対的真理、揺るぎない仏教の教えとして位置づけ、徹底して人々に知らしめたのである。厩戸皇子が『三経義疏』の注釈書を撰

述して以降、この因果応報説はわが国の仏教宗派にとどまらず、江戸時代の神道、儒教、仏教の「三教一致」の宗教思想統制が行われた際にも深く影響を与えている。『因果經和讃』に記された事柄は、現代社会では受け入れることの出来ない差別的な記述ばかりである。

結び

「障害者」の表記を可能にするため、常用漢字表に「碍」の字を追加してほしいという障害者団体の要望に対して、2020年に政府が出した結論は不可であった。その理由は、「障碍」の文言は仏教語として存在し、負の意味を有するため、「碍」の追加は認めないというものであった。

その見解を『三経義疏』を始めとして、本稿で繰り返し検証してきた。『法華經』では心身に障害のある人を題材にして、人々への戒めの事例として因果応報を説いている。加えて、わが国の仏教は、奈良仏教、平安仏教、鎌倉仏教と時代の流れの中で変容してきたが、どの時期の仏教においても因果応報の教えは重要な教説として位置づけている。

人間は輪廻転生の存在であり、その在世時の善惡の業に応じて、幸不幸の結果が現れることを説いている。前世の業に応じて現世があり、現世の行いによって来世の結果が決まるといふものである。家制度によって世代を継承してきたわが国においては、ご先祖さまの悪行の結果として不幸、災厄が家に現れるという教えであり、俗にいう「親の因果が子に報い」といわれるものである。

この因果応報の教えがわが国の「障害者観」に大きく影響を及ぼしていると言っても過言ではない。現代社会にあっても、人々が捉える因果応報の響きは「天罰」や「罪のつぐない」、「罰があたった」などといった負の言葉として捉えてしまう言葉である。『經典』を検証する限り、「障碍」は悪霊を意味し、その言葉を用いて「障害者」の表記に改正することは考えられないことである。

今も変わらず、絶対的真理として因果応報の教えを説く宗派は少なくない。しかし、それによって当事者や関係者の心をいたく傷つけているのである。特定の人々を負の存在事例にして教説を説くことは、社会の人々に差別観を植え付け、さらに差別を助長することであり、絶対にあってはならない。それらは人権蹂躪、人権侵害の何ものでもないことを再認識するべきである。

「碍」の字表記問題は、単に表記の改正だけにとどまらず、人権意識が希薄といわれるわが国において、人々の人権意識、人間観を問う重要な課題なのである。

[引用・参考文献]

長岡兼薫編『仏説善惡因果經』大日本監獄教誨師通信所、1892年。
 此村庄助『因果經和讃』此村欽英堂、1911年。
 『漢文和文 善惡因果經』大八木興文堂、1935年。
 南条文雄『仏説無量壽經講録』真宗典籍刊行会、1936年。
 圭室文雄『江戸幕府の宗教統制』評論社、1972年。

第4講：146 「御苦労さん」

この逸話について今回注目したいことは二つある。一つは、「宿の亭主から、「あのお方が、庄屋敷の生神様や。」とて、赤衣を召された教祖を指し示して教えられ、お道の話が聞かされた」というところである。つまり、この宿の亭主から、「にをい」をかけられることによって、教祖を知ったということである。それなくして、この逸話はなりたない。

もう一つは、教祖が佐治登喜治良に対して、「御苦労さん。」と声をかけられて、佐治は、「お声を聞いた一瞬、神々しい中にも慕わしく懐かしく、ついて行きたいような気がした。」というところである。

1. 「あのお方が、庄屋敷の生神様や」

この逸話の舞台は、明治17年春、奈良の今御門にある榎屋という旅館である。『ひながた紀行』（第2版、天理教道友社、2019年、291頁）には、「明治十七年春の御苦労の際、教祖は「榎屋」という旅館にも寄られている」とある。奈良監獄署での御苦労のあと、榎屋に寄られたことがあったようである。

この逸話によると、佐治は宿の亭主から「あのお方が、庄屋敷の生神様や」と教えられ、お道の話が聞かされた。湖東大教会から出版されている伝記『佐治登喜治良』（昭和43年）では、この時の様子が口述筆記された資料より次のように引用されている。

「其ノ際始メテ御教祖ヲ拜ス。人々ガ、「アノオ方ガ生神様ヨ、庄屋敷ノ天理王様ヨ」ト囁クノヲ聞クヤ何ノトナク敬慕ノ情禁ズル能ワズ恭シク拜礼セリ」（『佐治登喜治良』19頁）

佐治は軍隊の演習でたまたま奈良にただで、教祖のことは全く知らなかったが、そのとき宿の亭主からきた「生神様」についての話は、佐治の心を強く打ったようである。

この宿の亭主は吉本という人であった。伝記『佐治登喜治良』には、榎屋について調査したときの、近所の人たちの会話が次のように記されている（『佐治登喜治良』24～25頁、但し、個人名は、仮名に変更した）。

「吉本さんは信者さんではなかったけれど、町内の有力者でもあり、仲々^{おとこぎ}侠気のあるお人やったようすわ」

と丸井歌吉（仮）の孫に当たるといふ、丸井まつ子（仮）、榎屋の前の家の吉水コメ（仮）という七十七才の婦人たちが、交々語ってくださった。

「監獄ではお水の他何んにも食べはらへなんだそうやが、平気やったんやて」

「イヤ、何んで監獄へ入れられはったの」

と、コメ女の孫娘の高校生らしいのが口を挟んだ、

「昔はみんなそうやったんや」

「イヤそらまたなんでやの」

と、孫とお婆さんのやりとりは果しが無い。

この伝記が刊行される当時には、今御門町界隈の高齢者の間にまだ教祖に関するこのような噂話が残っていた。それほどこの周辺の人々にとっても教祖の御苦労は、印象深い出来事だったようである。この会話の中で、榎屋の亭主が、「信者さんではなかったけれど、侠気のあるお人」と表現されているのは興

味深い。警察からすると教祖は要注意人物である。そんな教祖を宿に招き入れることは、いらぬトラブルを招きかねず、警察の目も気になる。それでも、信者でもないのに教祖を宿でお世話した榎屋の亭主を、地元の人々は「侠気のあるお人」と評した。それは、この地元の人々が、何度も監獄署に連れていかれる高齢の教祖（生神様）に心を寄せ、いたわしく思ったことを示している。佐治も同様に、この「生神様」に深い感銘を受けたのであった。佐治はその後地元で再びお道と出会い、「おやさの我身にお掛けくださる負託」を感じ、道に尽くすようになる。

2. 教祖による「御苦労さん」

「御苦労さん」ないし「御苦労さま」は、相手の骨折りをねぎらう言葉で、挨拶言葉ともなっている。現代では「目上の人に使うのは失礼にあたる」とされることが多い。この意味で教祖の「御苦労さん」を理解すると、「月日のやしろ」であり、高齢でもある教祖が青年に、「御苦労さん」と挨拶されたという、特に目新しいこともないお話に思われる。

しかし、「御苦労」という言葉の歴史を調べると、少し事情が異なってくる。倉持益子『「御苦労」系^{おとこぎ}労い言葉の変遷』（『明海日本語』第16号）によれば、「御苦労」は1970年代から上司に対して使うべきでない表現とされるようになるが、かつて（江戸期）は目上に対するねぎらいの言葉で、敬意表現であったという。

この「御苦労」の用例を踏まえると、教祖の「御苦労さん」の解釈も変わってくる。明治17年春、たまたま奈良の宿近くで通りすがった青年に、教祖は「御苦労さん」と声をかけられた。当時、年長者が若い人に、そのように声をかけられることはあまりなかったはずである。

この時の佐治青年にとっても、「生神様」とされる方が若輩の自分に「御苦労さん」と敬意を込めて声をかけられることは印象的な出来事だっただろう。ただでさえ「生神様」について宿の亭主に聞いて感銘を受けた上に、「なんと私のことを立てておねぎらい下さる」と驚き、さらに心を打たれたのではないだろうか。逸話では、「お声を聞いた一瞬、神々しい中にも慕わしく懐かしく、ついて行きたいような気がした」と記されている。

教祖は、誰にでも「御苦労さん」と声をかけられることが常であったそうである（『逸話篇』195話参照）。誰にでも「御苦労さん」と声をかけられたということは、どんな相手に対しても、相手を立て、その人をまるごと受け入れ、その働きを心からねぎらわれたことを表している。この一言に救われた人は大勢おられたのではないだろうか。特に苦労のなかに懸命に、日々歩んでおられた人々にとって、教祖の「御苦労さん」は、受け入れられている、認められている、ついて行きたい、との思いとともに、明日を生きる活力を与えるものであったことだろう。

この教祖の逸話から、いつもできるだけ自身の心を低くし、誰に対しても相手を立てて敬意を表し、相手を心からねぎらうという、お道を通る上での基本的な心構えを学ぶことができるのではないだろうか。

第361回研究報告会「諸井慶徳の宗教論—教義学との関連をめぐって—」(9月27日)

久保 大生 (東北大学大学院)

本報告は、諸井慶徳(1915～1961)の宗教論を、教義学的な視点、宗教学的な視点、さらに諸井自身の信仰観の3つの視点を重ね合わせることで読み解いていこうとするものである。

諸井にとって、お道とは「人間完成の道」である。それは、お道において、人間が親神様の心尽くしたうえでの存在であり、人間存在の根拠が与えられ、その生命の意義としての「陽気ぐらし」が教えられたからであるという。こうした理解は、宗教が人生の最も根本的な基盤を成すという、彼の理解に重なる。

同時に、この理解の上に、諸井は宗教哲学的な場において、Urgrundとしての根源存在と、信においてある人間という論が展開していくと考えられる。

諸井の論は、天理教の信仰を基盤にしており、それは、天理教という特殊の中に、世界すなわち普遍の真理が存在するという理解の上に成り立っていると言うことができる。

発表後の質疑応答において、諸井の論を今、再読していく上での大事な視点、また、今後、どのような論点を整理していくべきかの意見を、多数いただいた。



トルコでの国際ワークショップに参加(10月4日)

澤井 真

国際ワークショップ「スーフィー思想と実践—過去から現在へ—」が、トルコの首都イスタンブールにあるウスキュダル大学を会場に開催された。開会冒頭では、ウスキュダル大学長が開催の辞を述べるとともに、記念撮影などが行われた。

本ワークショップは、研究プロジェクト「イスラーム神秘主義と宗教的・政治的権威に関する総合的研究」(科学研究費補助金(B)、代表:澤井真)の一環で行われたものである。ワークショップでは、ウスキュダル大学スーフィー研究所に在籍する3人のトルコ人研究者と、プロジェクトに関わる3人の日本人研究者から1名ずつ、各セッションの発表者として発表し討議を行った。

合計3セッションで開催されたが、筆者は第1パネルで「スーフィズム—霊の世界への指導性」(Sufism: Leadership to the Spiritual World)と題した発表を行うとともに、第2パネルの司会を務めた。なお発表では、イスラーム神秘主義が登場する経緯として、担い手であるスーフィーらが預言者との繋がりの中なかでいかに自らの思想的立場を確保していったかについて考察した。

なお、ワークショップはYouTube上でも同時配信されたが、ウスキュダル大学の動画チャンネルで視聴可能である。

2023年度公開教学講座のご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ(9) —

2023年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

- 第1回 6月 井上昭洋所長
167話「人救けたら」
- 第2回 7月 尾上貴行研究員
168話「船遊び」
- 第3回 9月 金子昭研究員
122話「理さえあるならば」
- 第4回 10月 澤井治郎研究員
146話「御苦労さん」
- 第5回 11月 島田勝巳研究員
165話「高う買うて」
- 第6回 1月 堀内みどり主任
113話「子守歌」

2022年度「教学と現代」

3月25日に開催された2022年度「教学と現代」『『元の理』を描く—生命・ジェンダー・芸術—』をオンラインで配信しています。

研究所ホームページよりご視聴ください。

グローバル天理

第24巻 第12号 (通巻288号)

2023年(令和5年)12月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan